

英語の原体験

前川 太市

“イン尿ハンド”

旧制中学校に入って、初めて英語に接した。教科書は **Choice Reader** といったと思う。チョコレート色の固い表紙で、小学校のペラペラの白黒の表紙の教科書に馴れていた自分には、急に大人になったような気がした。教えてくれたのは、担任でもある小柄な、縁なし眼鏡をかけたK先生。ユーモアにあふれ、親しみやすい授業であった。

What have you in your hand?

のところで、K先生は「**in your hand** は“イン ヨウ ハンド”と読むが、インとヨウはくっついて実際は“インニョウ”と聞こえる」と言って、黒板に大きく

イン尿

と書いた。皆がドット笑った。これで英語がいつぺんに好きになった。じつに他愛のない話である。K先生はこのように、初めて英語を学ぶ、中学1年生に絶えずユーモアを交えて、熱心に教えてくださった。教室はいつも明るく、クラスの大半の者が英語の時間を待ち望むようになったようである。私は英語の初歩をK先生に学んだことを、いまでも感謝している。

ゴールドディ先生

2年生になると、何と英会話の時間があつた。講師はジョン・ケール・ゴールドディ先生といった。オーストラリア人とのことだった。こう書きながら、赤ら顔だったという印象だけで、先生の顔がどうしても思いだせない。中学2年生のとぼしいボキャブラリだから、きわめて幼稚な会話内容だったと思うが、先生の発音には驚かされた。自分が聞いた、生まれて初めての外国人による外国語であった。今習っている教科書を先生が読んで、これを繰り返すのである。イソップ物語である。

例の“Once upon a time”で始まる文章を彼は

“ワンス エポナ タイム”

と大声を張り上げて発音するのである。しばらくK先生の英語の時間 **upon** がでてくると、皆がことさら“エポン”と発音してK先生を苦笑させた。

あるとき、ゴールド先生は皆に、なぜあなたはイソップ物語をよむのか、と尋ねた。先生は席のまえから順に同じ問いを繰り返して、返答させる。答えは

Because it is interesting.

ばかりである。先生は明らかに、不満そうである。自分の番が近づいてくる。私は咄嗟に先日K先生に習ったばかりの、**not only but also** を思いだし、こう答えた。

Because it is not only interesting but also instructive.

すると、ゴールド先生は私の左手をつかんで上にあげたまま、教壇の所まで連れていき、そうだ、この **boy** の言うとおりに、イソップ物語は **instructive** なのだ、ただ面白いだけではないのだ、と言ったことを早口にまくし立てた。その間ずっと私の左手を握ってあげたまま、いささか興奮して喋るのである。私はべつに深い意味があつて言ったのではなく、それより **not only but also** という、いささかシャレた表現が通じたことが無性に嬉しかったのである。

英語の面白さの深化

○先生はいささか、こわい先生であつた。毎回、英文を暗誦させるのである。それはよいのだが、できないと出席簿で頭をごつんと叩くのである。だから恐怖心が先立って、当時暗誦した文章をあまり覚えていない。今思い出せるのはつぎの文章だけである。

Work while you work and play while you play is the maxim which is the old as well as the young should act upon.

同じクラスに後に英文法の大家になったM君がいた。かれは中学時代から

英語は抜群にできたが、O先生が **finite verb** をフィニットバープと発音するのを「あれは困るな」と苦笑いしていたのを覚えている。O先生もM君も故人になってしまったいま、こんなつまらぬことを思い出すのである。

3年生になると、旧制高校、専門学校受験を意識して、問題集や副読本が使われるようになった。そのとき、内容の英文は忘れてしまったが、「どんな親しい楽しい友人であれ、訪ねてきた友人がグッドバイと言って帰ったあと、いつもなぜかホットするものである」という文章があった。これを読んだとき、私は突然大きな発見をしたように思った。というのは、これまで読んできた英文は、極端に言えば「雨が降る日は天気が悪い」式の内容に何の感動をともしなわぬ文章であった。このとき初めて、例えば徒然草を読んだときと同じ、人生のある局面についての発見を英語で知ったのであった。これは、考えてみると大きな飛躍だったような気がする。英語の面白さが深くなった瞬間であった。

それ以来、現在にいたるまで英語を学んでいる。人生の終幕がチラチラ見え始めてきた今も、月に2回技術英語の勉強会にでかける。たまに「よくご勉強ですな」と言われることがある。「ほかにこれという趣味もないので、まあ楽しみです」と答えることにしている。本人は、論語の「子曰ク、之レヲ知ル者ハ之レヲ好ム者ニ如カズ、之レヲ好ム者ハ之レヲ楽シム者ニ如カズ。」という名言を頭に浮かべている。しかし、私はまだ、こと英語に関して「之レヲ楽シム」境地までには、程遠いようである。というのは、毎回の勉強会でささやかながら、新しい発見があり、実は「之レヲ知ル」段階をうろついているのが本当のところだからである。まことに英語は奥深く、人生は短いのである。